talk! talk! talk! TBSアナウンサー・久保田智子さん

TBSアナウンサー

久保田智子さん

TBSで朝の情報番組を担当し、現在は夜の人気番組「筑紫哲也 NEWS23」のスポーツキャスターとして活躍を続ける久保田智子さん。親しみやすい笑顔とキャラクターで多くの視聴者に愛されているアナウンサーだ。「趣味のために生きている」と言い切るほど多趣味な久保田さん。今回は、趣味のひとつである写真について、仕事と写真とのかかわりについてじっくりとお話をうかがった。

プロフィール

くぼた・ともこ。1977年、神奈川県横浜市生まれ。中学、高校と広島県で過ごす。東京外国語大学卒業後、2000年にTBS入社。入社3年目で朝の情報番組「おはよう！グッデイ」のメインキャスターをつとめる。その後も「ウォッチ！」「はなまるマーケット」「王様のブランチ」など多くの番組にたずさわる。現在担当している「どうぶつ奇想天外！」は2002年から司会をつとめ、また「筑紫哲也NEWS23」のスポーツ担当キャスターとしても活躍している。
趣味は写真だけでなく、歌舞伎、絵画、映画観賞、園芸、DJなど多数。得意の英会話はTOEICで920点を取るほどの腕前。

趣味のために生きている！ そのうちのひとつが"写真"なんです

写真はいつ頃から撮られているのですか？

趣味として写真を撮り始めたのは大学2年生か3年生か、それくらいです。ちょうどその頃、HIROMIXさんなどの女性写真家のブームみたいなものがあって、まさにその流れにのっかったというような感じですね。あとはその頃、周りの友人たちにクリエーティブな趣味や仕事をしている人が多くて、自分にも何かそういうことができないだろうかなって思っていたんです。そこにそういう流行りもあって、気軽に始められそうだなと思ったんです。

何か自分で物を作ったり創造することに憧れがあったのですか？

物を作るといいますか、手に職をつける、自分で何か技術を持つということにこだわりがあったんです。女性でもちゃんと食べていけるようにならないといけないですから！（笑）。それを考えたときに自分で何かを作り上げられるというのは強いなって思ったんです。それが、今こうしてアナウンサーになったというのにもつながっているんですけどね。だから、写真にかかわらずいろいろやりましたよ。

写真に限らず、たくさんご趣味をお持ちだそうですね。

そうなんですよ、プロフィールに2、3行では収まらないくらいあるかもしれません。興味のあることはなんでもやってみたくなってしまうんですよね。やってきた中で残っているうちのひとつが写真という感じです。

趣味がかなり重要な位置を占めているんですね。

私は趣味のために生きているんです！そのために仕事をしていると言ってもいいくらい。
というのも、アナウンサーの仕事というのは、趣味が仕事に生かせる、趣味も仕事になる職業なんですよ。たとえば私は歌舞伎が好きでよく見にいくのですが、社内にも歌舞伎好きのプロデューサーさんがいて話をしているうちに、歌舞伎の番組を作ろうなんていう話が出ているんですよ。自分の趣味がそうやって広がって仕事になっていったりすることがあるんです。いい仕事だなって思います。

この仕事をしていると、普通では見られないようなものの裏側が見られたり、会えないような人に会えたりもするのでしょうね。

ええ、本当にその通りですよ。
私は中村勘三郎さんのファンで、私の全て、結婚したいっていうくらい大好きで（笑）。勘三郎さんの襲名記念の写真集を篠山紀信さんが撮って出版するというので「NEWS23」にお二人でご出演くださったことがあったんです。もちろんご本人にご挨拶をすることができて、もう本当に感動してしまいました。隣にいた紀信さんに申し訳ないくらい、「勘三郎さん、勘三郎さん」って言って興奮してしまって（笑）。
でも、そういうことがあるからこの仕事をしてきてよかったなと思うし、仕事も充実してくるんだと思います。ただ原稿を読むだけではつまらないですからね。

写真に記録したいというよりも 純粋に"撮る"ということが好き

「以前TBSのホームページで「東京物語」というタイトルで写真付きのコラムを書こうと企画して、

たくさんの趣味の中で写真が趣味として残っているというのは、何か理由があるのでしょうか。

やはり手軽だというのは大きいですね。たとえば絵を描くとなると、場所も道具も必要ですが、写真だとカメラ1台持っていれば誰でもどこでもパシャって撮れる。家でも、ふらっと出かけたときでも、いつでも気軽にできるからこそ長く趣味として続いているんでしょうね。

写真のどんなところが面白いと思いますか？

実際に見たものと撮ったもので、イメージがまったく違ってしまうところが面白いなと思います。あと、普段は何も考えずに見ている風景も、ファインダーを覗くと、どこを切り取ろうとか考え出す。その感覚が面白いですよね。ちょっとずらすだけで全然違う画になったりして。それから、ファインダーの枠の中に景色をはめ込む、枠の中にはめ込むものを自分で決める作業というのが好きなんです。

普段からカメラは持ち歩いていらっしゃるのですか？

いえ、毎日持ち歩いたりはしていないですね。今日は撮るぞっていう意志がないとなかなか外に持っていって撮ることはありません。最近では家のベランダを撮るのが好きなんですよ。園芸が趣味で、ベランダでトマトやラディッシュなどを育てていて、それを撮っているんですよ。観察日記をつける小学生みたいですけど（笑）。

その写真を成長記録のように並べたり？

あ、そういうわけではないんです。撮ったものを見返したりはほとんどしないので。

記録として残したいから撮っているわけではないのですか？

たぶん、記録したいというよりも“撮る”ということが純粋に好きなんです。天気が良いときにベランダに出て、ちょっと写真を撮ってという、その感じがいいんです。だから、トマトをどういう構図で入れようかというのはすごく考えますが、トマトの成長過程なんていうのは、実際どうでもいいことなんです（笑）。

撮ったらそこで完結するんですね。

そうかもしれません。でも撮ったものがいつか何かに使えたらいいなっていう思いはあるんですよ。撮っておけばどこかで発表できるかなって。自分の思い出を蘇らせるために写真を使うことはないけれど、作品として世に出す機会があったらいいなって思うんです。
今「NEWS23」のホームページで「写字爽論」という写真を入れたエッセイを書いているんですよ。筑紫さんが「多事争論」だからっていうことで。そういう場面でいつか使えるかもしれないって思って撮ったりはしています。

まずは出身大学を撮ろうと思って巣鴨に行ったときの写真です」

「そうしたら大学が移転のために壊されていて、ショックでした。どんより雲の日で、ますます暗い気持ちになりました（笑）」

動画から受け取る情報よりも 写真に凝縮された情報の方がすごいこともある

人物を撮影したりはしないのですか？

人物写真を撮ることはまずないですね。自分が撮られることはあっても人を撮ることはないです。あ、でも仕事で写真を撮らせていただくことがあって、以前ドイツのコンフェデレーションズカップの取材に行ったときに、ドイツのサポーターや集まっている人、著名人の方、ベッケンバウアーやベンゲル監督を撮ったことはありますよ。それは番組で、そういう写真を撮るように求められたので撮ったものですが。

仕事で写真を撮られることがあるのですね？

趣味で写真を撮っているということもあって「NEWS23」の中で写真を撮って、番組で紹介することがあるんです。仕事では、ちゃんと撮れているのか、いい写真が撮れているのか不安でたまらないですよ。私の場合は、スポーツの決定的瞬間を撮るというよりは、現場の様子を伝える写真が多いのですが、それでも撮れていなかったらどうしようって思います。
仕事柄、周りに多くのスポーツフォトグラファーさんがいらっしゃるんですが、その一瞬、一瞬を撮る緊張感を楽しんでいる感じがするんですよね。打つ瞬間、蹴る瞬間、いつ起こるかわからないものをモノにしていて。その一瞬を見逃してしまったら、撮れなかったらって思うと私は手が震えてしまうと思います。そういうのを見ていると、私は写真は趣味の範囲でよかったなって思います（笑）。

ご自身の撮った写真を使って視聴者に情報を伝えるというのはどのような気持ちなのでしょうか？

難しいなと思いましたね。私がいいなと思う写真があったとしても、それがテレビで使えるわけではないんですよね。ディレクターさんが番組で使う写真を選んでくださるのですが、いかにアップで撮れているかとか、いかにわかりやすく伝わるかなんですよね。構図を工夫して芸術的に撮るとかそういうことではないので。意外な写真がセレクトされたりしますよ。「あ、テレビではこういう写真がいいのか」って思いながら見ています。

コンフェデレーションズカップの取材で訪れたドイツで撮影

満員の客席。興奮する様子もなく、きちんと座って観戦している

テレビも写真も伝えるメディアではありますが、違いを感じることはありますか？

違い……うーん、そうですね。伝える側というよりも、受け取る側に大きな違いがある気がしますね。写真は1枚をじっくり見たり、写真集を自分でめくったり、情報を得るために受け取る側が積極的になりますよね。でもテレビはご飯を食べながらだったり、何気なく見ていたりするので、常に受け身ですよね。
テレビは動画ですから、写真に比べるとそこに含まれる情報量は絶対多いと思うんです。でも受け取る側のかかわり方がテレビは薄いから、受け取る情報量は写真の方が圧倒的に多くなるのではないかと思います。

なるほど。

勘三郎さんの写真集を見ていて、歌舞伎をこんなにも見てきたつもりでも、「あ、こんな表情していたんだ」っていう新しい発見と感動があって驚いたんです。動いているものって意外に見れていないんだなっていうことと、止まっている写真だからこそ伝わるものもあるんだなってことを感じました。多くの情報を動画で流すより、写真のように凝縮された一瞬一瞬の方がすごかったりする、そういうこともあるんだなと。

逆に、動画の方がより伝わる場合もあるのでしょうね。

ええ、そうなんだと思います。

言葉を扱い、興味を生かすことのできる仕事 「アナウンサーは天職だと思います」
なぜアナウンサーになろうと思ったのですか？

手に職をつけたいというのはあったんですが、でもなぜアナウンサーかと言われると、実は私もよくわからないんですよね……正直に言うと“なんとなく”なんです（笑）。アナウンサーは花形職業ですし憧れはありましたので、ずっと受けようと決めていたんです。でも、何かを伝える仕事がしたいだとか、テレビを見て感銘を受けてとか、そういう感じではありませんでしたね。

アナウンサーという仕事よりも、テレビへの興味があった？

ええ、そうですね。テレビとか、そういう業界への興味が強かったのかもしれません。私は映画が好きで、映画とテレビはとても密接なものだと思っていたんです。それで、映画の中で使っている効果をテレビで使ったら面白いのではないかってことを何度も面接で言っていたら、受かってしまったという。今考えると滑稽な考えだったんですが、その熱い訴えがよかったのかもしれないですね。

実際に入社されていかがでしたか？

そうやって入ったので、入社してからすごく苦労したんですよ。通常、入社試験を受ける前にアナウンサーになるための基礎を教えてくれる専門学校に行く人が多いのですが、私は入社するまでアナウンサーの基本をまったく知らなかったんです。たとえば“鼻濁音”や“無声化”といった言葉すら知らなくて、研修中にそれを覚えるのが大変で、全身にじんましんが出てしまったくらい悩みました。教える側としては、中途半端に知っているよりも、教え甲斐があって良かったって言われましたけど、当時は本当に辛かったです。

今、アナウンサーという仕事についてはどう思っていらっしゃるのでしょうか。

自分にすごく合っている仕事だと思っています。自分の趣味や興味を仕事に生かせるというのはもちろんなんですが、私は言葉を扱う仕事に向いていると思うんです……こういうふうに自分で言うのもなんですが（笑）。私は英語を独学で学んである程度話せるようになったんです。だから、言葉を学ぶということに自分の脳は合っているんじゃないかなって思っているんですね。
言葉を学ぶことが好きで、英語を勉強して、アナウンサーになってもう1度日本語の勉強をする機会をいただいて、やっぱり言葉がすごく好きなんだってよく分かったんです。そういう意味で、アナウンサーは天職だなって思っているんですよ。

アナウンサーや写真などを通して…… 何かで自分を表現し続けていくことが目標

いかに言葉を使って伝えるのかということを常に考えていらっしゃるのでしょうね。

はい。伝えるための言葉を選んでいく、選んだ言葉によってどう印象が変わるのかを考える、それがやりがいなんだと思います。

それはとても難しいことのように感じます。

そうですね、大変な仕事だと思います。でも現場に立っている方としては、自分が持っているもの以上は絶対に出てきませんし、変に悩み過ぎても仕方ないと思うんです。背伸びせず、等身大の自分でやっていこうって思うと、構えていたものがふっとなくなって、楽になったんですよ。

構えていた時期もあった？

ありました。すっごく構えていた時期（笑）。構え過ぎで何をやっているのかわからなくて、背伸びばっかりしていましたね。でも、最近やっとそう思えるようになって、今はすごく仕事が楽しいんです。楽になって自由奔放にやり始めちゃっていますね。

では最後に、将来の目標はありますか？

将来どうなりたいか……そう言われるとまったくよくわからないんですけど……今はスポーツキャスターをさせていただいていますが、スポーツだけではなくて、垣根を作らずアナウンサーとしていろいろなことをさせてもらいたいなとは思いますね。ただ、何かひとつ得意な分野を持っていたり、自分の興味の中でもっと深く掘り下げていけるようなことができたらなとは思っているんですけど。あとは、将来……結婚するかな。あ、そういう意味じゃない？（笑）。

いえ、それも目標ですよね（笑）。結婚してもこの仕事を続けていきたいと思いますか？

はい、今の仕事はずっと続けていくと思います、どういう形であれ。本当にこの仕事が好きなんですよ。アナウンサーも、人に話を聞くのも、それを表現することも。
そう、私は表現することがすごく好きなんです。写真が好きなのも、それで自分を表現したいという気持ちがあるからだと思うんです。とにかくずっと、何かを表現していきたい。言葉を話すだけじゃなく、文章を書いてもいいし、写真を撮って、フォトエッセイもいいかもしれない！

辛い時期も経験され、今とても充実していらっしゃるんですね。

ええ、でも今がピークかもしれないですから（笑）。先はわからないですよ。だからこれからも努力していかなきゃいけないですね。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.